

Title	<翻訳> 『標本』 ・ 『蠟人形館』
Author(s)	マイリンク, グスタフ; 中岡, 翔子
Citation	文芸表象論集 = Literary Arts and Representation (2014), 1: [3]-[24]
Issue Date	2014-03-31
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/LAR_1_(3)">https://doi.org/10.14989/LAR_1_(3)</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 標本

二人の友がカフェ・ラデツキーの角窓のそばに座り、額を集めてこつそりと話し合っていた。

「彼は立ち去ったよ。今日の午後、召使と一緒にベルリンへ。屋敷は完全にからっぽだ。おれは今しがたそこから来たんだが、自分で調べて確かめたんだ。ペルシア人二人しか住んでいなかった。」

「つまり、彼は電報にだまされたってわけかい?!」

「それについて疑ったことは一瞬だつてなかった。なんといつてもファビオ・マリーニの名を聞けば、彼を引き留めることはできないんだから。」

「実際のところおかしなもんだ。彼はファビオ・マリーニと数年間ともに暮らしていたのだからな。しかもマリーニが死ぬまで。それなのに彼はマリーニについての何らかのニュースをベルリンでさらに知ることができるだろうか。」

「ああ! マリーニ教授は彼にまだたくさんのお話を秘密にしていたといううわさだ。一度マリーニは、話の最中に自らあれやこれやもらしてしまった。それは半年くらい前、善良なアクセルがまだおれたちのもとにいたころだった。」

「実際、ファビオ・マリーニのなぞに満ちた標本製作には何か本当のところがあるのだろうか? 本当にきみはこのことをあくまで信じているのかい? シンクレア。」

「今は「信じる」ってことは問題じゃない。おれはフレインツェでマリーニによって標本にされた子供の死体をこの目で見たんだ。言っておくが、誰もが子供はただ寝ているだけだと断言しただろうよ。なんたつて硬直の痕もしわもたるみも全くな

— カフェ・ラデツキーはブラハのクラインザイテ地区に実在したカフェの名前である。フーゴー・シユタイナー・プラークは、マイリンクに宛てた手紙の中でカフェ・ラデツキーで語り合った日々のことを回想している。

かったんだからな。それどころか生きた人間のバラ色の肌でさえ持ち合わせていたのさ。」

「ふむ。きみは本当にペルシア人がアクセルを殺したと思うかい？」

「それは分らないよ、オットカル。だけど、やつぱりアクセルの運命について確かめることがおれたちふたりの良心の務めだ。もしその時アクセルが何らかの毒によって一種の死後硬直の状態に置かれているだけだったとしたら、どうだろう！ああ、おれがどうやって解剖学研究所の医者たちを説得したか。医者たちに生き返らせてくれるよう懇願さえしたんだ。——あなたはいったいぜんたいどういうつもりですか。この男が死んでいるのは明らかです。ドクター・ダラシエコーの許可なしに死体を手術することは禁じられていますということさ。彼らはおれに契約書を見せた。そこには、アクセルがその時々々の証明書の所有者に死んだ後の自分のからだを売り、すでにそれに見合う500フロリン銀貨をしかじかの日に受け取り、署名したとはつきりと書かれていた。」

「まさか、ぞつとするよ。そんなことが今の時代に法的効力を持っているなんて。そんなことをしばしば考えると、言いよわない憤りにとらわれる。かわいそうなアクセル！凶暴な敵であるあのペルシア人が契約書の所有者かもしれないってことをアクセルが予感していたらよかったのに！アクセルはいつもこう考えていた。解剖学研究所自体が……」

「それで弁護士も全く成果を上げることができなかったのかい？」

「すべて無駄だった。かつてダラシエコーが夜明けに庭で発作のあまり口から泡を吹くほど長いことアクセルの名前を罵っていたと年老いた牛乳売りの女が証言したが、見向きもされなかった。ほんとうに、ダラシエコーがヨーロッパの医学博士でなければよかったのに！これ以上何を話す必要がある。一緒に来てくれるのか、くれないのか、オットカル。決めてくれ。」

「覚悟はできている。しかしこれだけは注意してくれ。もしおれたちがどろぼうとして捕まってしまったらつてことさ！ペルシア人の学者としての評判は非の打ちどころがない！それに、おれたちには疑いを指摘するもつともらしい根拠がほんとう

に全くないのだ。気を悪くしないでくれ、だがきみがアクセルの声を耳にしたとき思い違いをしたってことはほんとうにありえないのかい？どうか怒らないでくれ、シンクレア。そのとき起こったことをそのままもう一度おれに話してくれ。きみはひよつとするとその前にすでにいくらか興奮していたのじゃないか？」

「ちつともそんなことはなかったさ！半時間ほど前おれはラジーンニにいて、そこからもう一度ヴェンツェル礼拝堂とヴァート大聖堂を眺めた。固められた血のような彫刻で飾られたこの古い異様な建物は、おれたちの心に深い印象を、とてつもない印象をいつも新たに与える。そして城内の牢と錬金術師の小路<sup>三</sup>。おれは城の坂道を下り、われ知らず立ち止っていた。というのも城壁を通ってダラシエコーの屋敷へとつづく小さな扉が開いていたからさ。その時おれははつきりと聞いた。窓からこつちに響いてきているにちがいない。ある声が1、2、3、4と大声で告げていた。（おれはそれがアクセルの声であったと神に誓うよ）。

ああやつぱり、おれがその時すぐさま屋敷に押し入っていたら……だけどおれがよく考える前に、ダラシエコーのトルコ人の召使いが城壁の門をボタンと閉めたのさ。言っておくが、おれたちは屋敷のなかに行くべきだ！そうすべきだ！もしアクセルがほんとうにまだ生きているとしたらどうだろう！いいかい、おれたちを捕まえることなんて誰にもできやしないさ。いったい誰が夜中に古い城の坂を越えるだろうか。お願いだ。きみは驚くだろうが、おれは今や錠前をこじ開ける道具を使えるんだ。」

二人の友は、計画を実行する前に暗くなるまで通りをうろついた。それから彼らは壁をよじ登り、ついにペルシア人が所有  
ニラジーンはプラハ城とプラハ城周辺を意味しているが、ここではプラハ城をさして用いられている。

三 マイリンクは、実際にプラハに存在する「黄金の小路」を意図的に「錬金術師の小路」と言い換えている。この言い換えは、マイリンクの長編小説『ゴーレム』（二九一五）にもみられる。

する古風な屋敷の前に立った。

フルステンベルグ庭園にある高台にぽつんと立つその建物は、草に覆われた城の坂道の側壁に死んだ看守のようにもたれかかっている。

「この庭、その下にある古い榆の木には何か言いようのない恐ろしさがあるよ。」オットカル・ドーナルはささやいた。

「見ろ、威嚇するようにラジーンが空にくつきりと浮かび上がっている。城のあそこ、照らし出された張り出し窓！ここクラインザイテに奇妙な空気が流れているというのはほんとうだな。待ち伏せる死の不安のために、まるで生き物すべてが地中深くに引き返してしまったかのようだ。ある日突然この影のような光景が幻影のように、蜃気楼のように沈んでしまうかもしれないという予感を持ったことがあるかい？幽霊じみた獣みたいにうずくまって眠っているこの生命が何か新しいものへと、恐ろしいものへと目覚めるかもしれないという予感を！見ろ、この下には白い砂利道が…まるで血管のようだ。」

「さあ来てくれ。」シンクレアは急ぎ立てた。「おれの膝は興奮のあまり震えているよ。こっちへ。ちよつと見取図を持っていてくれ。」

扉はすぐに開き、二人は手探りで古い階段を上った。階段の上では、陰鬱な星空が丸窓を通して一筋の光をかるうじて投げかけていた。

「火をつけるな。下の園亭から光に気づかれるぞ。従うんだオットカル！おれのうしろをぴったりとついてこい。気をつける。ここは一段壊れてるぞ。通用戸が開いている。こっちだ、こっち。左だ。」

彼らは突然ある部屋に立っていた。

「そんなに音を立てるなよ！」

「おれのせいじゃない。扉が勝手にまたボタンと閉まったのさ。」

「明かりをつけなければ。おれはいまにも何かをひっくり返すんじゃないかとひやひやしているよ。たくさんの椅子が行く手を遮っている。」

その瞬間、青い火花が壁際にきらめいた。そして、うめきに似た呼吸のようなざわめきが聞こえてきた。かすかにきしむ音が地面から、あらゆる隙間から迫ってくるように思われた。

ほんの一秒、ふたたび死のような静寂。これに続いて、ぜいぜいと息苦しうにあえぐ声が大声でゆっくりと数えた。

いーち………にーい………さーん………

オットカル・ドーナルは叫び声をあげて狂ったようにマッチ箱を擦った。彼の両手はおそろしい戦慄のあまりわなわなと震えていた。ついに明かりが……明かりが！二人の友はおたがい真っ青な顔をして見合った。「アクセル！」

……よーん……ごー……ろーく……なーな……

数える声はそのくぼみから来ている。

「ろうそくに火をつけろ！急げ！急げ！」

はーち……きゅーう……じゅーう……じゅーういーち……

壁の穴の覆いから出ている銅器の竿にブロンドヘアーの人間の頭が引っ掛かっていた。竿は頭部の曲線の真ん中に突き刺さっていた。あごの下の首に絹のサッシュが巻かれている。その下には気管と気管支のついた二つの赤みがかかった肺翼。その間で、心臓がリズムカルに動いていた。心臓には金の導線が巻きつけられており、導線は床に置かれた小さな電気装置とつながっている。ぴんと張るほど満たされたいくつもの血管が、首の細い二つの瓶から血を吸い上げていた。

オットカル・ドーナルは小さな燭台の上をろうそくを置くと、気を失って倒れないように友にしがみついた。

それはアクセルの頭で、唇は赤く、花ざかりの血色、まるで生きているかのよう。大きく見開かれた目は、向かい合った壁にかかっている拡大鏡を恐ろしい表情で見つめている。その壁は、トルクメニスタンやキルギスの武器や織物に覆われて光っていた。至る所に東洋風の布地の風変りな模様。

部屋は標本にされた獣でいっぱいだった。へびと猿がいくつか奇妙な姿勢に無理矢理されて散乱した本の下に横たわっていた。

サイドテーブルの上に置かれたガラスの水槽では、人間の胴体が青みを帯びた液体のなかで浮かんでいた。

石膏でできたファビオ・マリーニの胸像が台座から部屋を真剣に見下ろしていた。

二人は一言も発することができなかった。彼らは催眠術にかけられたようにこの恐ろしい人間時計の心臓を見つめた。その心臓は生きているかのように振動し脈打った。

「どうか後生だから……ここから離れよう……おれは気絶しちまうかもしれない。……ペルシアの怪物め、呪われる。」

二人はドアへ行こうとした。

そのとき！標本の口から発していると思われる不気味にきしむ音がふたたび。

二つの青い火花がひらめき、火花は拡大鏡によって死者の瞳孔にまっすぐ反射された。

彼の唇が開き、やっとのことで舌を前に突き出すと、前歯のうしろで曲げた。そして声は息苦しそうにあえいだ。

じゅーうごふーん。

すると口は閉じ、顔はふたたびまっすぐ前を見つめた。

「おそろしい！！脳は働いている、生きているんだ。……離れよう、離れるんだ、戸外へ、外へ！ろうそくを、ろうそくを  
持つてくれ、シンクレア！」

「後生だからさあ開けてくれ……なぜ開けないんだ？」

「できないよ……そこを……そこを見てくれ！」

内側のドアノブは指輪で飾られた人間の手だった。死者の手。白い指は虚空に爪を立てていた。

「こつちだ、こつちだ、布を持って！何を怖がっている……いったいこれはアクセルの手じゃないか！」

二人はふたたび廊下に立ち、ドアがゆっくりと閉まり掛け金が下りるのを見た。

そこには黒いガラスの標識がかかっていた。

ドクター・モハメド・ダラシエ・コー

解剖学者

ろうそくが、レンガの階段を吹き上がるすきま風にゆらめいた。そこでオットカルは壁によるめき、うめき声をあげてくずおれた。

「ここだ！それはここだ……」オットカルは鐘を鳴らす引き綱を指した。

シンクレアは近づいて照らした。

彼は叫び声をあげてうしろに跳び下がり、ろうそくを落としてしまった。

ブリキの燭台が石から石へと音を立てた。

二人は狂ったように髪の毛を逆立てて、ひゅーひゅーと息を切らしながら暗闇のなか階段を駆け下りた。



「ペルシアの悪魔。ペルシアの悪魔。」

## 蠟人形館

「メルヒオール・クロイツァー<sup>四</sup>に電報を打ったのは名案だった！だが、彼がおれたちの頼みに応じると思う？シンクレア。もし彼が始発列車を利用していたら、」ゼバルドウスは時計を見た。「今にもここに到着するにちがいない。」

シンクレアは立ち上がり、返事をするかわりに窓ガラスの向こうを指した。

そこに背の高い瘦せぎすな人物が一人、通りを急いでこちらに近づいてくるのが見えた。

「日常の出来事が恐ろしいほど目新しく思われる数秒間が、意識を何度も何度もかすめていく、そんなことが君にもときには起こるかい、シンクレア？まるで突然目を覚ましすぐまた眠りこみつつも、一瞬の間、意味ありげな謎に満ちた出来事をのぞきこむかのように。」

シンクレアは友を注意深く見つめた。「それで何が言いたい？」

「おそらくそれが蠟人形館でおれを襲った気分を害するような影響だろうと思うのさ。」ゼバルドウスは続けた。「おれは今日すこぶる神経質なんだ。今しがたメルヒオールが遠くから近づいて来て、近くに来れば来るほど彼の姿がますます大きくなるのを見たとき、そこには何かがあった。おれを苦しめる何か。何か、何と言ったらいいか分からないが、おれにとって親しみのないものが。その親しみのないものは距離があらゆるものを飲み込むことができるってところにあつた。今や物体であるにしろ音であるにしろ、思考や幻想や出来事であるにしろすべてを。もしくは反対におれたちは、あらゆるものをまず遠くからちつぽけなものとして見て、それらがゆっくりと大きくなっていくんだ。すべて、すべて、実体がなくて空間的な道のり

<sup>四</sup>メルヒオールという名前は、東方の三博士の一人で黄金ないしは王権を象徴するメルヒオールからきている。このメルヒオールに「クロイツァー金貨」<sup>II</sup>「少額の金」という家族名が冠せられることでメルヒオール・クロイツァーの名前が金の揶揄であることが分かる。

を進むことのないにちがないものも。けれどいい言葉が見つからない。どういう意味か分かるだろうか？そんなふうに、みんなが同じ法則のもとに立っているようじゃないか！」

シンクレアは思案げにうなずいた。「たしかに、多くの出来事や思想はこっそりと忍び寄って来る。あたかも「そこ」に何か高台のようなもの、もしくはそのようなものがあって、その後ろに出来事や思想は隠れているかのようだ。それらは突然隠れ家のうしろから飛び出し、おれたちの前に思いがけずも巨大に立ちはだかるんだ。」

戸が開く音がした。これに続いてすぐにクロイツァー博士がワイン酒場の彼らのもとに歩いてきた。

「メルヒオール・クロイツァー、こちらが化学者のクリスティアン・ゼバルドウス・オーベライト<sup>五</sup>です。」シンクレアは二人を互いに紹介した。

「あなたが私に電報を打った理由はすでに分かっています。」今しがた到着した男が言った。「ルクレティア婦人の古くからの心痛でしょう！？昨日、モハメド・ダラシエコーの名前を新聞で読んだとき、私も恐怖におののきました。すでに何か探り出しましたか？同一人物ですか？」

舗装されていない中央広場に蠟人形館のテントが立っている。テントのてっぺんにはぎざぎざした小さな無数の鏡が、象形文字で言葉をかたどっている。

モハメド・ダラシエコーの東洋風見世物小屋

コンゴ・ブラウン氏による実演

<sup>五</sup> オーベライトという名前は、マイリンクによる短編小説『J・H・オーベライト、時間・蛭を訪ねる』（種村季弘訳）にもみられる。J・H・オーベライト（一七二五—一七九八）は哲学者であり医者であり、ニーベルンゲン写本Cを発見した人物として知られている。

その鏡から夕焼け空の最後の照り返しがバラ色に輝いた。粗野で刺激的な光景がけばけばしく彩色されたテントの帆布の壁は、誰かが中で働きまわりもたれかかるたびに、かすかに揺れて頬がふくれるようにふくらんだ。<sup>六</sup>

木の階段を二段上がると入り口に通じており、そこには等身大の女性の蠟人形が派手な衣装を着て、釣鐘型のガラスのなかに立っていた。

ガラスの眼のついた青白い顔がゆっくりと向きをかえ、テントのまわりで押し合いへしあいしている群衆をひとり、またひとりと見下ろした。それから横に視線を向けた。まるで、切符売り場に座っている肌の黒いエジプト人から秘密の指令を期待するかのように。そして、三度びくんとはねるように首を後ろにのけぞらせて長い黒髪を振りかざした。しばらくするとその顔はためらいがちにもとに戻り、どうにもしようがなく目の前をみつめ、先ほどの動きを繰り返した。

ときおり人形は激しいひきつけを起こしたかのように突如として手足をよじり、頭をあわただしく後ろにのけぞらすと、額がかかたとに触れるまで背後に曲げた。

「そこにあるエンジンが、このぞつとする動きを引き起こしている仕掛けを動かし続けているんだ。」シンクレアは声を抑えて言い、入り口の反対側にある野ざらしの機械を指した。四サイクルエンジンで動いているその機械は、使い古された音を立てていた。

「電気、さても生命、さても生きているものすべて。」エジプト人が上で一本調子に語り、印刷されたビラを一枚下に手渡した。「さても始まりは三十分以内。」

「この有色人種がモハメド・ダラシエコーの所在について何か知っているとありますが？」オーベラ

<sup>六</sup> マイリンクは他の作品でも生命のないものを生きているかのように描いている。

イトは尋ねた。

しかしメルヒオ・クロイツァーは聞いていなかった。彼はビラの観察にすっかり没頭し、とくに際立った箇所をぶつぶつと読み下していた。

「磁石のようにくつついた双子、ヴァーユとダナンジャヤ(歌付き)。セこれは何だ？あなたは昨日もこれを見ましたか？」  
彼は突然聞いた。

シンクレアはいいえと言った。「生きている出演者は今日初めて登場するようですよ。それと——」

「あなたはおそらくルクレティアの夫であるトーマス・チャルノクと個人的な知り合いだったのでしょうか。そうじゃないですか、クロイツァー博士？」ゼバルドウス・オーベライトが話の腰を折った。

「もちろんだとも、わたしたちは長いつきあいの友人でした。」

「それでああなたは彼が何らかの悪事を子供相手に計画しているかもしれないと思わなかったのですか？」

クロイツァー博士は首を横に振った。「たしかにチャルノクの性格のなかで精神病がゆつくりと現れるのを見ました。しかし、その精神病がこうも突然発症されるとは誰も予想できませんでした。彼はかわいそうなルクレティアを嫉妬心からのひどいいさかいで苦しめたのです。たとえわたしたち友人が彼の疑惑に根拠がないことを責め立てたとしても、彼はほとんど耳を貸さなかったでしょう。彼のなかに固定観念があったのです！それから子供が生まれ、そのときわたしたちは彼の具合がよくなるだろうと思いました。実際またそうなったかのように見えました。しかし彼の疑惑の念はかえってますます深くなっていたのです。そしてある日、わたしたちはおそろしい知らせを受け取りました。突然、狂気が彼を襲い、彼は暴れ叫び、揺りかごから乳飲み子をひったくってあつという間に逃げてしまったということでした。」

セヴァーユはインドの風の神であり、ダナンジャヤはヒンドゥー教の聖典『マハーバーラタ』に登場する英雄アルジュナの別名である。

搜索はすべて無駄でした。どこかの誰かがモハメド・ダラシエコーと一緒にいる彼を駅の停留所で見たと主張しました。数年後、おそらくイタリアから知らせがきました。トーマス・チャルノクという名前のよそ者が絞首刑にされた。チャルノクは小さな子どもと東洋人とを連れ立ったところをしばしば目撃されていました。ダラシエコーと子どもの行方は分かっています。

それ以来、わたしたちはいたずらに探しまわったのです！そういうわけで、この年の市のテントに掲げられた表書きがアジア人と関連しているとは考えもつかなかったのです。一方でふたたびコンゴ・ブラウンというおかしな名前！？私はトーマス・チャルノクがかつてときどきその名前をもらっていたのではないかという考えを捨てきれません。それにしてもモハメド・ダラシエコーは身分の高い生まれのペルシア人で、まさに未曾有の学識を持っているのに、どうやって蠟人形館を手に入れたのでしょうか？！」

「おそらくダラシエコーの召使いだつたコンゴ・ブラウンが、今は主人の名前を悪用しているのではないのでしょうか？」とシンクレアが推測した。

「そうかもしれないね！わたしたちは手がかりを追わなければなりません。もうひとつ私がこだわっていることは、アジア人がトーマス・チャルノクに子供をさらうという考えを起こさせ、提案させましたのではないかということです。ダラシエコーはルクレティアをとことん憎んでいました。彼女がもらした言葉から考えると、彼女が彼を嫌っていたにもかかわらず、彼が絶えず結婚を申し込んで彼女を悩ませたのではないかと思われまます。

しかしその裏にはダラシエコーの執念深さを解明しえるべつのさらに深い秘密があるにちがいありません！とはいえルクレティアからはもう何も聞き出せません。ほんのちよつとでもそのことに触れようものなら、彼女は興奮のあまりほとんど意識を失ってしまうでしょう。

そもそもダラシエコーはこの家族にとって邪悪なデーモンでした。トーマス・チャルノクはすっかり彼に呪縛されており、ペルシア人のことをアダム以前の秘密の手腕のたぐいであるおそろしい秘儀に通じるただひとりの生存者とみなしていることをたびたびわたしたちに打ち明けました。この秘儀にならって、想像を絶するような何らかの目的のために人間をいくつかの生きている部分に分解することができそうです。わたしたちはもちろんトーマスを空想家とみなし、ダラシエコーをたちの悪いペテン師とみなしました。しかし、証拠と手がかりを見つけることはどうしてもうまくいきませんでした。

とはいえそろそろ出し物が始まりそうですね。エジプト人はおそらくテントをぐるりと囲む火口に火をつけているところでしょう？」

「ファトメ、東洋の真珠」という演目が終わると見物人はあちこちにどっと流れていくか、赤い布が張られた壁際ののぞき穴から荒っぽく彩色されたパノ라마をのぞき込んだ。そのパノ라마はデリーの征服を描いたものであった。

別の人々はガラスの棺の前に沈黙して立っていた。その棺の中には死につつあるトルコ人が重苦しい息づかいで横たわっていた。むきだしの胸は砲弾によって撃ちぬかれており、傷口のまわりは腐敗し青白くなっている。

蠟人形が鉛色の臉を開けるたびに、ぜんまい仕掛けのパチンという音が箱からかすかにもれてくる。多くの人がこの音をよく聞くためにガラスの壁に耳をあてていた。

入り口のそばのエンジンはパチンパチンとテンポをきざみ、パイプオルガンに似た楽器を動かしていた。

ぎこちない息の詰まる音楽を演奏した。大きいのはつきりとはしない響きとともに。それは水のなかで響いているかのような何か奇妙なもの、やわらかいものを含んだ響きであった。

テントのなかには蠟とくすぶる石油ランプのにおいが充満していた。「ナンバー311、ブードウーのオービア・ワンガ魔法の

髑髏<sup>ハシ</sup> シンクレアはピラを読みあげ、テントの一角に三つ置かれた人間の切断された頭蓋をゼバルドゥスと観察した。それは口と目が大きく引き裂かれており、壁に掛けられた小箱からおそろしい表情をしながら本物そっくりに見つめ続けていた。「あの頭が蟻からできているんじゃないかって本物だって知ってるかい？」オーベライトが驚きながら言い、ルーペを取り出した。「これらがどうやって標本にされるのだろうか、おれには見当もつかないよ。驚いたことに、首の切断面はすべて皮膚で覆われているか、皮膚が伸ばされている。おれは継ぎ目ひとつみつけられん！まさしく、その頭はかぼちゃみたいに勝手に成長し、一度も人間の肩にのつたことなどないかのようだ。ガラス蓋をちよつとでもあげられたらいいのに！」

突然うしろからエジプト人が彼らに言った。「さても、すべて蟻です。さても生き生きとした蟻。死人の頭は高すぎるし、におう……フィ……」エジプト人は彼らの近くへこつそり忍び寄ってきていたのだが、彼らは気づかなかつたのだ。エジプト人の顔は、狂い笑いをこらえるようにひきつっていた。

シンクレアとゼバルドゥスは驚いて見交わした。「たとえ黒んぼが何も聞いていなかったとしても、一秒前はまだダラシエコーの話をしていたんだ。」しばらくしてからシンクレアが切り出した。「クロイツァー博士はファトメからうまく聞き出せただろうね?! 最悪の場合、おれたちは晩に彼女をワインに誘わなければ。まだ彼は外にいて彼女と話している。」

一瞬音楽の演奏が止まった。誰かがドラを叩くと幕のうしろで甲高い女性の声が大声で告げた。

「ヴァーユとダナンジャヤ、磁石のようにくつついた双子、∞歳、大いなる世界の不思議、彼らが歌います！」  
テントの奥の舞台に群衆が押し寄せた。

クロイツァー博士は再びなかに入ると、シンクレアの腕をつかんだ。「もう住所を手に入れましたよ。」彼はささやいた。「ペルシア人は別の名前を使って。パリに暮らしています。これがその住所です。」彼は、二人に細長い紙をこつそりと見せた。「わ

<sup>ハ</sup>「オービア」とはアフリカの民間信仰、「ワンガ」とはまじないのことである。アレクスター・クロウリー(一八七五—一九四七)が、『法の書』(一九〇四)の中でこの二つに触れている。



たしたちは次の列車でパリに行かなければなりません！」

「ヴァーユとダナンジャヤ、彼らが歌います。」女性の声が再び金切り声で叫んだ。

幕がわきに引かれると、召使いのような服を着て腕に包みを抱えたぞつとするような容姿の生きものがふらふらと舞台の上  
に歩み出た。

色とりどりのビロードのぼろ切れと金の組み紐を身にまとった溺死者の死体が生き返ったかのようにだった。

嫌悪の波が群衆のあいだを通り抜けた。

その生き物は、背丈こそ大人と同じだが、顔つきは子どもだった。顔、腕、足、からだ全体、指でさえ不可解なほど浮腫んでいた。

まるで弾力のある薄いゴムのようにその生きもの全体がふくらんでいた。

唇と手の皮膚は透明で、空気か水が詰まっているかのようにほとんど透き通っている。目は生気を失い、理解のきざしはなかった。その目が、途方に暮れてあちらこちらを見つめていた。

「ヴァーユ、大きいほうの兄弟」女性の声が聞き慣れないなまりで言った。女がヴァイオリンを手に幕のうしろから登場した。その女は、猛獣使いの衣装に身を包み、毛皮の縁飾りのついた赤いポーランドブーツを履いていた。

「ヴァーユ」彼女がもう一度言い、ヴァイオリンの弓で子どもを指した。すると彼女は冊子をぱたと開き、大声で読み上げた。

「この二人の男の子は今や八歳、大いなる世界の不思議。彼らは一つのへその緒をただでつながれています。へその緒は、  
3 エレの長さで全くの無色透明。もし一方を切り離せば、もう一方も死んでしまうにちがいない。学者たちはびっくり仰天。  
ヴァーユ、彼は実年齢よりも大きい。すくすくと育った。しかし精神的には遅れたままです。それにひきかえ、ダナンジャヤ

は明敏な頭脳の持ち主なのにとっても小さい。まるで赤ん坊のよう。なぜなら彼は皮膚を持たずに生まれてきて、全く成長することができないからです。彼は暖かい洗浄水の入った動物の玉袋のなかで保存されなければならない。彼らの両親は依然として知られていません。大いなる自然の戯れなのです。」

彼女がヴァーユに合図を送ると、彼は腕に抱いた包みをためらいがちにひらいた。

こぶし大の頭が刺すようなまなざしとともに現れた。青みをおびた血管の網で覆われた顔、赤ん坊の顔、しかし顔つきは老人めいている。いふなればその顔は憎しみにゆがみ陰険で意地悪く非常に形容しがたい身持ちの悪さに満ちていたので、見物人は思わず知らず後ずさりした。

「ぼ……ぼくの兄弟だ……だ……ダナンジャヤ」浮腫んだ生きものが舌足らずに言い、再びあてもなく観客を見た。

「私を外に連れ出してください。気絶してしまいそうだ。なんとしたことか。」メルヒオール・クロイツァーがそうささやいた。二人は、気絶しそうなメルヒオールをエジプト人のうかがうような目つきのそばを通ってテントからゆつくりと連れ出した。

女がヴァイオリンに弓を当てた。彼らはなお、彼女が弾くへたなヴァイオリンと浮腫んだ男がそれに合わせて消え入りそうな声で歌う歌曲を聞いた。

「わたしには一人のせ……ん……ゆ……うがいた。こ……ん……な……良い……やつは他にいない。」<sup>九</sup>

その間、赤ん坊ははっきりと言葉を発音することができないためにつんざくような音で母音だけをわめきたてた。

「ああああああ……いいいい……おおあい……いいいいああ……」

クロイツァー博士はシンクレアの腕にもたれかかり、新鮮な空気を勢いよく吸い込んだ。

九一八〇二年にルートヴィヒ・ウーラントによって作詞されたドイツ語の軍歌、*Der gute Kamerad* の第一節。戦時下においてはしばしば政治的に利用され、追悼式で歌われた。

テントからは見物人の拍手が聞こえた。

「あれはチャルノクの顔です！ぞっとするほど似ています。」メルヒオール・クロイツァーがうめいた。「どうしたことが……私には分からない。目の前にあるものすべてがまわっている。私は今にも気絶するにちがいない。ゼバルドウス、どうか車を呼んでてください。私は役所に行くつもりです。とにかく何か起こるにちがいません。あなたたち二人はすぐにパリへ行ってください！…モハメド・ダラシエコー…あなたたちはやつをその場で逮捕させなければなりません。」

二人の友はふたび寄り合い、メルヒオール・クロイツァーが急ぎ足で通りを近づいて来るのを人気のないワイン酒場の窓から眺めていた。

「まさにあのときとおなじだ。」シンクレアが言った。「なんとも運命は自らのおもかげを求めることか！」錠がぱたんと閉まる音が聞こえ、クロイツァー博士が部屋に入ってきた。彼らは互いに握手を交わした。

シンクレアがパリで丸二カ月間、ペルシア人を追ったが徒労に終わった様子を詳しく語ったあと、ついにゼバルドウス・オーベライトが言った。「ところであなたはわたしたちに長々と報告をする義務がありますよ。あなたはいつもほんの短い手紙しか送ってくださらなかったのですから！」

「私はすぐに書く気を失くしてしまうのです。危うく話すことも…」とメルヒオール・クロイツァーが弁解した。

「自分があの時よりも年老いたように感じます。つねに新しい謎に取り巻かれているのを見ることは、想像以上に人へとへとに疲れさせます。思いつきのなかの永遠に解けない謎を引きずらねばならないということが多くの人々にとって何を意味しているか、大部分の人にはさっぱり理解できないでしょう！おまけに、かわいそうなルクレティアの痛みの発作を毎日見なければならぬのです！」

手紙に書きましたが、彼女は少し前に苦悩のあまり亡くなりました。

コンゴ・ブラウンは拘留場から脱走し、真実を得ることができたであろう最後の源が絶たれたのです。

あなたがたにはあとで一度すべてを詳しくお話するつもりです。しかし時が印象を和らげるまでは…今はまだ疲れ切っています。」

「もちろんですとも。しかしいったい手がかりはまったく見つからなかったのですか？」シンクレアが聞いた。

「あのとき繰り広げられた醜い光景…それはわたしたちの裁判医が信じることができないか信じることが禁止されているものです。いかががわしい迷信、張りめぐらされた嘘、ヒステリックな自己欺瞞、それはいつもそう呼ばれています。しかしそのようなたくさんのものが驚くほどはつきりとそこにはありません。

私はあのとき即座に全員を逮捕させたのです。コンゴ・ブラウンは、あの双子だけでなく、そもそもモハメド・ダラシエコーの見世物小屋すべてをかつて召使いとして働いたことに対する報奨として贈られ、受け取ったのだと白状しました。ヴァーユとダナンジャヤは、人工的に結合させた生きものだそうです。ペルシア人は∞年前に、その生きものを一人の子どもから作り上げたのです。(その子はチャルノクの子どもでした。) しかも生の営みを壊すことなしに。ダラシエコーは、異なる磁力の流れを分解しただけだそうです。磁力の流れはあらゆる人間的な性質を備えており、人はなんらかの隠された方法によってそれを互いに分けることができるそうです。そして彼は、動物の代用品の助けを借りてついに一つの体から全く異なる意識の表層と性質をもった二人を生じさせることに成功したのです。

そもそも、ダラシエコーはお奇妙な術に通じていました。あの三つの魔除けの髑髏も実験の余りに他ならないそうです。そしてそれらはかつて長い間生きていたらしいのです。コンゴ・ブラウンの恋人のファトメヤ、害にならない他の人々もこのことを認めました。

ファトメがさらに述べたことには、コンゴ・ブラウンは癲癇持ちで、その奇妙な発作は特定の月相のときに彼を襲い、発作が起きると彼は自分がモハメド・ダラシエコーになる錯覚を起こすそうです。この状態になると彼の心臓と呼吸は止まり、顔かたちは、彼女が以前何度かパリで目にしたダラシエコーを目の前にしていると思われるほど変わってしまうらしいのです。そればかりかダラシエコーは、打ち勝ちがたい磁力を放っており、何らかの命令の言葉なしに彼がしてみせた動きとひねりをすぐにまねさせることができますそうです。

これは舞踏病のように次から次へとうつっていく…いやおうなしに。ダラシエコーは無類の柔軟性を備えており、たとえば一風変わった苦行僧の無理な姿勢をすべて完璧にマスターしていた。その柔軟性をうけると謎に満ちた現象や意識の分割を起こすことができるらしいのです。ペルシア人は自らその柔軟性をコンゴ・ブラウンに教えました。しかもその動きはこの世のどのヘビ人間も決して真似できないほど難しいそうです。

街から街へ、蠟人形館をともなった旅行の途中、コンゴ・ブラウンは子どもたちをそのような方法でヘビ人間に調教するためにこの磁力を利用しようとたびたび試みたそうです。しかし、ほとんどの子どもは背骨を折るか、そうでない子どもも脳への影響が強すぎて知的障害になってしまったのです。もちろん、医者たちはファトメの供述にかぶりを振りましました。しかし、あとで起こったことはおそらく彼らを大いに考え込ませたに違いありません。つまり、コンゴ・ブラウンが隣の部屋をぬけて尋問部屋から脱走したのです。予審判事が語ったことによれば、彼が黒んぼに関する調書を取ろうとしたまさにそのとき、黒んぼがにわかに彼をじっと見つめ、両腕をいぶかしげに動かしました。予審判事は疑わしく思い大声で助けを求めようとしたが、すでに硬直性の痙攣を起こしており、舌がある方法で勝手に捻じれたそうです。その方法を彼はもはや思い出せないそうですが、(そもそも口腔からその痙攣が始まっていたに違いありません。)そして彼は意識を失ったのです。」

「いったいぜんたいモハメド・ダラシエコーが結合した生きものを子供を殺すことなく作り上げた方法については全く何も

知ることができなかったのですか？」ゼバルドウスが言葉をさえぎった。

クロイツァー博士はかぶりを振った。「そうです。しかし、以前トーマス・チャルノクが私に語った多くのことが私の脳裏にひらめきました。

彼はいつもこう言っていました。人間の生命はわたしたちが考えているものとは違う何かであり、いくつかの磁力の流れから構成されている。流れの一部は体の内側を、一部は体の外側を循環している。皮膚を剥がされた人間が酸素不足で死ぬにちがいないと学者たちが言うならば、彼らは思い違いをしている。皮膚が空気から抽出する物質は酸素とは全く異なる何らかの流動体だ。皮膚はまたこの流動体を吸収するのでもない。皮膚は、磁力の流れの表面張力を可能にしているある種の格子であるだけだ。おそらく金網のように。金網を石鹼水に浸すと、隙間と隙間をシャボン玉が覆うように。

人間の精神的な性質もまたあれやこれやの流れが優勢になることでその刻印を受け取っていると彼は言いました。つまり、一つの力がとりわけ優勢になることでわたしたちの理解をはるかに超える忌まわしい性格が生じると考えられるのだそうです。」

メルヒオールはほんのしばらく黙り込むと、物思いにふけた。

「私はこびとのダンンジヤヤがいかにおそろしい性質を備えていたかを思い出した際に、この理論のおそろしい証明をこられすべてに見出すのです。そもそもその性質によって彼の生命の泉は若返るのですが。」

「あなたはまるで双子が死んだかのように話していますが、いったい彼らは死んだのですか？」シンクレアが驚いて尋ねた。「二、三日前でした！…それが一番よかったのです。双子のかたわれが一日の大半をそこで漂っていた液体が干からびました。そして誰もその液体の構成を知らなかったのです。」

メルヒオール・クロイツァーは目の前をみつめて身震いした。「ぞつとするようなこと、名付けようもないほどおそろしい

ことはまだありました。ルクレティアがそれを全く知らずにいたこと、すくなくとも彼女の耳に入らないままであったことは、神の祝福です！ぞっとするような結合した生きものを見ただけで彼女は打ちのめされたのです！まるで母の気持ちが真つ二つに引き裂かれたかのようでした。

今日はそのことについて何もしゃべらせないでください！ヴァーユとダナンジャヤのおもかげ…それはまだ私を狂気に陥れるのです…」彼は思い悩んでいる様子だったが、にわかには跳び上がって叫んだ。「ワインを注いでくれ……私はそれについてもはや考えたりしないぞ。とにかく早く何か別のことだ……音楽だ…他の考えならとにかく何でもいい！音楽だ！」

そして彼は、壁ぎわに置かれている磨き上げられた自動演奏機の方へよろめき、硬貨を投げ入れた。

チン。硬貨がなかで落ちる音が聞こえた。

装置がブーンと唸った。

すると三音の絶望的な響きが沸き上がった。少したってから歌が部屋中にやかましく鳴り響いた。

「わたしには一人の戦友がいた。こんな良いやつは他にいない。」